

不登校,その原因と回復における要因の一考察

—不登校経験者の意識を探って—

京都西山高等学校 辻本剛久

【キーワード】不登校, グループ化, 同調, ひとりぼっち

1 研究目的と背景

本校は2017年に創立90周年を迎えた私立の高等学校である。全日制課程普通科に、2004年、通信単位制課程が併設された。通信単位制課程に入学、または他校から転学してくる生徒のなかには、不登校を経験したものは少なくない。2016年度の卒業生93名のうち、中学校または転学前の高校において一年間に30日以上欠席があったと報告されている生徒は38名いた。そのなかで、一年間に100日を超える生徒は9名いた。過去に不登校を経験しながらも高校を卒業した生徒38名のうち19名が、大学・専門学校への進学または高校紹介による就職を果たしている。子どもたちが不登校に陥る要因を、片山は「なんらかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景」⁽¹⁾と述べ、さらに中学校1年で最も多く発生していることを報告している。不登校の原因は多様であり、またいくつかの要因が絡み合っているとも考えられる。本研究では不登校を経験し、その後不登校から回復をして高校を卒業し、進学や就職を果たした二人の生徒のインタビューから、不登校になった原因と回復における要因を探ることとした。この二人の事例が、全ての不登校生にあてはまるとは当然のことながら言い難い。しかし、不登校の状況で喘いでいる子どもやその保護者の不安感を僅かでも拭い、そして不登校に立ち向かっている教師にとって、解決策の糸口を見つけ出す支援となることを目的とした。

2 研究方法と、制度による回復の要因

本研究に協力してくれたのは、本課程を2017年3月に卒業した生徒2名である。筆者は本課程の教諭である。進路指導主事であったことから、それぞれの生徒と進路面談を数回行った経緯がある。本人および保護者に本研究の主旨を説明したところ快く承諾を得たことから、卒業後にそれぞれ別の日程で、約30分間のインタビューにこたえてもらった。

本研究では数量的データの解析ではなく質的データの解析を重視することにし、インタビューによって今までの自分を振り返り、主観的な表現が含まれたストーリーを自由に語ってもらう様式をとった。両名とも中学校時代は欠席数が一年間で30日以上あり、「結局二年間ずっと家に引きこもってることになってしまったんですけど」「小学校のときは、ちゃんと行ってたけど、中学はもう、ほとんど授業を受けてないし」と自ら表現し、不登校であったことを認めている。インタビューの内容をすべて文字起こしセンテンスに分け、それぞれの特徴を分類した。インタビュー時は不登校の症状は回復し、高校も無事に卒業し進学や就職を目前に控えていた時期であったので、過去の振り返りはポジティブなフィルターを通しての発言であったことをご了承願いたい。

そもそも、本課程の生徒が不登校を回復して卒業できたのは、通信単位制課程という制度にそ

の要因があることは明らかである。まずは通信制課程の出欠席のしくみである。出席のみが数えられ欠席という概念は存在しない。面接指導(授業)の必要出席時間数は、教科ごとに設定された時間数を満たせばよい。欠席というマイナス要因は存在せず、出席というプラス要因のみが存在することは、不登校を経験してきた生徒にとって登校圧力を和らげることができる要因といえる。次に、本校の本課程においては事務的なクラスは存在するが、生徒が実際に活動する基盤になるクラスが存在しないことである。しかも単位制をとっているため、すべての授業が講座制である。つまり、その科目を登録した生徒が、各自の都合にあわせて出席する。ここでは生徒同士が横の繋がりに縛られる必要がなく、複雑なグループ化の影響を殆ど受けることがないのだ。さらに実質の学年もないため、三年間で卒業しなければならないという社会的通念から自分を追い込んでしまう圧力からも解放される。「18歳の3月に、何がなんでも卒業しなければいけない」というパラダイムをおきかえれば、スクールライフプランの形成がかなり楽になる。さらに、校則における服装や髪型、頭髪の加工、化粧品についても制限がないことである。バイク通学(原付のみ)も許可している。法律の範囲を逸脱しなければ、細かく指導を受けることはない。本課程の半分の生徒は、他校からの転校生であり、本校の全日制課程からの転籍生(課程を変更した生徒)である。前籍校において一度は高校生活に躓きながらも、高校卒業を目指すために行動を起こし、本課程で学ぶことを決意した生徒たちである。高校を卒業することに対して、高い意識をもっていることはいうまでもない。

このような制度のもとで学校生活を送ることにより、不登校は解消されていくと考えていた。しかし、今回の研究による卒業生のインタビューからは、別の要因が想定できるキーワードも見つけられた。インタビューの分析をもとにその論拠を追及することで、不登校を経験した生徒の意識の中に潜むコミュニケーションの捉え方を探り、制度だけに捉われない要因を明らかにしたい。

3 インタビューの分析

(1) 不登校になったときの特有の意識

不登校の状態にあるときは、学校をさばりたいという怠学とは異なり、学校には行きたいが、いざ家を出るようになったら行けなくなるという特性があるといわれている。二人のインタビューのなかにも、この意識ははっきりと表れている。

- ・ほんまに夜は行こうと思うんですよ
- ・朝になったらすごい胸が苦しくて
- ・息が出来ひんぐらいしんどくなって、やっぱり無理やーってなって
- ・行きたいのに行けないっていう、自分に腹がたってた
- ・すごい行かなあかんって思っていました
- ・ずっと、ほぼお母さんに、当たり散らしていたって感じですかね

家に居てはいけなさと感じながら、学校にも行けないため心の整理が出来なくなり不安定になる。「苦しくて」「しんどくなって」などは、その不安定なところから出てきたものだろう。またその葛藤が、「自分に腹がたってた」ということばになっていたのだといえる。この生徒は不登校のきっかけを、引越越しとネットでの失言としている。友人間でのコミュニケーションのつま

づきが原因であったので、このような特有の意識が表れたといえる。しかしもうひとり、いじめが不登校のきっかけであったため、登校したくないという意識の方が強かった。

- ・ んー、朝はもう、ほんまにいきたくなくて
- ・ なんか行ったふりして、どっか走って逃げていったり
- ・ 学校に行かなあかん日が来るって思ったら、明日は何す、何かされるんやろ、みたいな
- ・ 前の晩に、用意とかもぜんぜんしなかった
- ・ 朝は、起きた。んーでも、行きたくなくて
- ・ なんか行ったふりして、なんかどっかちがうおばあちゃんちとかいってたら

このように、体調が悪いのではないが、また怠けたいのでもないが、学校でいじめが待っているという恐怖心から「行きたくない」という意識が圧倒的に強かったことが伺える。家にも居ることができず学校にも行けないことから、第三の場所へいつている。「どっか、ちがう、おばあちゃんち」(どこか、自宅や学校とはちがう場所の、おばあちゃんの家)というように、ここでは自分の心の拠り所を祖母の家に求め、そこを居場所としたのである。

(2) 距離を感じさせる表現

インタビューのなかで、同級生たちや教師と距離を感じさせる発言が多くみられた。それらの言葉には、謙譲の意味合いが含まれ受け身的な表現も使っている。中学校時代の不登校を回想している場面で、この表現を用いている。

- ・ 学校にもどそうっていう、してくれたんですけど
- ・ 家にも来てくれたんですよ
- ・ 遊ぼうって言うてくれたんですけど
- ・ んー喋ってくれなかつたりとかして
- ・ 先生も、すごい必死にはなってくれるんですけど
- ・ 家にも来てくれたんですけど

良好な生徒と教師の関係ならば、「学校にもどそうっていう、してくれたんですけど」は「したんですけど」に、「家にも来てくれたんですよ」は「来たんですよ」と言っていたらう。現代の子どもたちは同級生にはもちろんであるが、特に担任など親しみの強い教師に対しても敬語も謙譲語も用いない傾向にある。つまり生徒からみた教師との関係は、年齢や立場の違いを認識しつつも上下関係は「自分(生徒)と同じ高さの感覚」をもっている。しかし不登校の状況であったときには、その「自分と同じ高さの感覚」はすでに失われているといえる。友人や担任に対してより丁寧な表現を使い、よそよそしい感じが受け取れる。同級生たちに対しては、以前は自分が受け入れられ仲が良かった友人グループであったが、今はそうではないと言っているようだ。

もうひとりはいじめがきっかけで不登校を起こしていたことから、いじめを受けていると感じていた時は、当然受け身的な感覚を抱いている。

- ・ 無視されるようになって
- ・ 引き出しのもの全部ぐちゃぐちゃにされてたり、鉛筆折られたり
- ・ 教科書とか破られてたり、落書きされてたりしたのも
- ・ 咳をただけで、すごいなんか言われて

これが登校できるようになると、受け身的な発言がなくなり、自分の行動を振り返っての発言に変化している。

- ・話せるようになったんです
- ・学校に行こうとおもった
- ・はじめてなんか、この人信じて、信じられるかもみたいな

登校できるようになると、自分から働きかけるような、主体的な(能動的な)表現に変化してくる。

(3) グループ化の中での孤立感

そもそも不登校になった理由は、学校における友人からの孤立である。不登校になってしまうのは子どもたちが、クラスのなかで形成している小グループから孤立してしまい、自分を受け入れてくれる友人がいなくなったことがその大きな理由であるといえる。

- ・なんかいきなり友だちが離れていったらどうしようとかいうプレッシャーは、ずっとあったんで
- ・なんか話そうねって言って家にも来てくれたんですよ、一緒にお勉強しようって、遊ぼうって言ってくれたんですけど
- ・(学校へ)いってみても結局はなんか、んー喋ってくれなかつたりとかして
- ・寄せ書きみたいな、早くおいでよ遊ぼうよみたいな手紙を書いてくれたのは、すごい嬉しかったんですけど、その時は、でもそれでも、行ってもグループがあるわけやし、行ってもひとりぼっちやし、そんなの楽しくないからって
- ・たくさんいるなかで、ひとりぼっちみたいな
- ・3年のときかなー、(略)部活の人らが、引退間際に、なんか、話、声、聞いてくれへんくなって
- ・話しかけてもみーんな無視するようになって
- ・お弁当もずーっと一人で食べてたし
- ・仲良かった人もみーんな離れていったんが、いややったかな

両名とも高校の本課程では不登校を克服していたこともあり、高校生活を終えようとしているインタビューの時期には、「ひとりぼっち」も楽だと言えるようになっていた。「ひとりぼっちがしんどい？」という筆者からの問いかけに対して、次のようにこたえている。

- ・いまぜんぜんひとりでも、いま、ぜんぜん一人の方が楽です
- ・あの大学・専門学校行くのに、(ほかの人は)友だち欲しい欲しいって言ってはるけど、私は、ひとり、まあでも、いいやって覚悟で
- ・(授業を)ひとりで受けたりとかするのが、楽やったりもしたんで
- ・ひとりで、ひとりで勉強したりとかしてたんで

これは、進学後に友だちをつくることをすべて否定しているわけではない。

- ・まあ、でも一人のときもあってもいいとは思うんですけど
- ・やっぱり友だちの存在はたぶん必要やろうし
- ・まっそんなに深入りせずって感じです

本課程の在学中は友人関係もよく、人間関係で悩むことはほとんどなかったようだ。通信単位制の本課程では、クラスや小グループという横に繋がる人間関係におけるわずらわしさが排除された環境のなかにいるため、「ひとりぼっち」に対する余裕が表れたのかもしれない。さらには、小学生の時に受けたカウンセリングでいわれたことが残っていたので、不登校を乗り切れたともいっている。

- ・ひとりである子の方が芯が強いんでって言ってもらえて、で、そこからずっと頭に残ってて

(4) アルバイトが不登校の克服に与えた影響

二人の生徒は、ともに高校入学後の早い時期から、登校する二日間をのぞいて長期のアルバイトをしていた。全日制課程の生徒たちがするアルバイトよりも仕事に従事する時間が長く、またその時間帯も夕方から夜間だけではなく、日中の時間帯も働いていることが多い。アルバイトがそれぞれの生徒に与えた影響を、みつけられる言葉をさぐってみた。

- ・そんな一人で責任負えへんと思って、あのーやっぱ辞めますってすぐ言ったんですけど、で、それでも引き留めてくれはって上司が、ずっとここまで続けてこれたんですよ。
- ・(仕事は)えっと、5月からですかね、高1の。その将来のことを考えて
- ・えとー、でも3年ちかく(続けていた)
- ・けっこうやる気はあったから、それでなんかやってたら、もう慣れて怒られへんようになって、逆に自分が教える側になって、けっこう成長したのもあるし
- ・いろんな話したり、いろんな話を聞けたり、勉強になったりするから、で続いて

アルバイトの場での人間関係は、長期にわたって固定されることは少ない。さらに年齢の相違から多様な考え方が存在し、認め合ったりぶつかり合ったりしている。仕事のなかで自己効力感を味わい、自己有用感をもったことで自尊感情へと繋がったと思われる。以前この生徒は、仕事に就いたから、高校に登校することに対しての抵抗がなくなったことを述べていた

(5) 教師の行動に対して

不登校が改善される前の教師の対応については、次のように語っている。

- ・先生たちもすごい学校にもどそうっていう、してくれたんですけど
- ・(学校でのカウンセリングは)それも夜やったんで、一年のとき、夜にひとりで学校まで行くのがしんどくって
- ・学校側のことしか考えてないやろみたいな、感じで思えてきてしまって
- ・家にも来てくれたんですけど、いやー、しんどくないからおいでよって
- ・そんな、しんどいから行けへんのにって
- ・ぜったい学校、一人休んだら、あのー学校の評判も下がるやろうし、不登校だしたっていうのが
- ・それで学校のことしか言っていないやんって思って、めっちゃ先生にも腹が立って
- ・そうですね。夕方とかによく来てくれはって

この時期の対応については、許容できない内容であることが伺える。それに対して転校した後

に、不登校が改善されていった時期の教師の対応については、次のように語っている。

- ・で、まあ先生たちが無理しなくてもいいよっていつてくれたりして、ちょこちょこは行ってたんですけど
- ・やっぱりその一今の自分があるのは、先生のおかげなんかなと思いますね

この生徒は、中学校時代に転校をすることで、不登校の状況を改善できた。当然のことながら、不登校の状態で行き詰まっていたころの教師と、転校後に改善がすすみ登校への意欲が出てきたころの教師では、やはりその対応に対する受け止め方に大きな違いがあることが伺える。

4 考察

(1) 不登校になったときの特有の意識について

登校することが出来なくなれば、自宅学習をすればよいのではないかと思われがちだが、不登校の状況にある子どもたちにとって家という場所は、居づらい場所となるようだ。住田は、「(学校がある)時間帯の家庭は子どもが本来居るべきでなく、居るはずのないところである。」⁽²⁾と、子どもたちが捉えていることを述べている。また土井は、「教室以外にも居場所があるから学校へ行かないのではなく、そこにしか居場所がないと感じて、気持ちが追いつめられてしまうから学校へ行けない子どもがいることにも留意しておくべき」⁽³⁾と述べている。インタビューの生徒たちは、学校には行きたいけど行くことができない状態であり、朝に起きることができないとか、遊びたかったからという理由ではないことがわかる。自宅にいて、学校も自宅も自分の居場所とならない葛藤がおこり、「ずっと、ほぼお母さんに、当たり散らしていた」と述べているように、精神的には不安定な状態であったといえる。また、もう一人の生徒のように、学校にも自宅にも居場所をつくれず、祖母の家に行っていたことから、このような精神的な不安定感から逃避するための行動をとっていたと捉えることもできる。

学校に行かなくてはならないと焦っている子どもたちにとって、家は居てはいけないところとなるのだ。この考え方は、義務教育の捉え方とも関係があるように思える。義務教育は、子どもたちにとっては権利ではあるのだが、現代における小学校や中学校は「いかなければならないという場所」と捉えられてしまっている。また教師や親などの大人たちが、そういう圧力をかけてしまっている場合もあるだろう。社会の変化に応じた子どもたちへの対応を、うまく見つけ出すことができないものだろうか。

また高校においても、「欠席日数や欠課時数が規定を超えれば、学校を辞めなければならない」という圧力を背負ってしまうが、「高校は退学してもかまわないんだ」「転校して別の高校へいけば良いんだ」という意識が生まれたら、その時点で登校する圧力からは開放されるということ、本課程に転校してきた生徒が語っていたことがある。突然「もう高校には行かない、退学したい」と申し出てくる生徒の心理は、このようところから生まれるのではないかと推察される。

(2) 現代のこどもたちのグループ化の構造について

インタビューの分析において、(2) 距離を感じさせる表現と(3) グループ化の中での孤立感を読み取れる発言があったことから、不登校になった生徒が学校やクラス、かつて自分も行動をともにしていたグループの生徒たちに対して、どのような捉え方をしていたのかを探ることにした。

そもそも人と人との繋がりには、年齢や立場が異なる縦に繋がる関係と、年齢や立場がほぼ等しい横に繋がる関係が存在する。縦の繋がりには、緊張感を保ち目的を達成するための関係が考えられる。そこには世代や経験の違い、または立場の違いが存在するため、コミュニケーションは縦方向の指示・命令系統が主であり、片方向の上意下達のコミュニケーションであるといえる。一方、同世代の繋がりには、かつては仲間同士が腹を割って本音を話し合うことができ、意見が行き来する横のコミュニケーションであった。つまり自分とは異なる考えに傾聴し、異論を受け入れる寛容さを持ち、そこで議論ができる場であったはずだ。しかし、現代の学校における子どもたち同士のコミュニケーションは、実際は片方向であるといわれている。堀出・原はいじめの背景についての説明の中で「仲間に誘われて、同調していじめなければ、自分が逆にその対象とされることへの恐怖心から集団に過度に同調してしまうのである。」⁽⁴⁾と、仲間集団の曖昧性や友人関係の希薄化を述べている。異論を唱えるのではなく、自分を抑えることに力を注いでいるのだ。子どもたちはグループの中では、みんなから同じ趣味嗜好であることが求められ、個性を抑えることで仲間であり続けられるというのだ。

クラス内に存在するいくつかの小グループについて土井は、「グループの内部だけで人間関係が完結してしまっているために、たとえ同じクラスの間であっても、グループが違えば別の世界の人間になってしまう」⁽⁵⁾と述べている。さらに「互いの交通手段を欠いた離れ小島のように、それぞれのグループが孤立したまま、クラスという大海に点在しているのです」⁽⁵⁾とも表現している。学校での小グループ化は、クラスの中がいくつかに分かれたのではなく、最初から全く別々の小グループが独立して存在していると考えられる。さらに「グループ相互の上下関係に過剰なほど気をつかいあっています。そして、格や身分が違う人たちのグループとは、それが下である場合だけでなく、上である場合でも、なるべく交友関係を避けようとしています」⁽⁵⁾と述べ、クラスにおけるグループ間の交流が薄くなっていることを指摘している。

また原は「グループ内でいじめられても、そのグループから離脱するよりは、むしろ形式的に依存関係を続ける方が安心できるという奇妙な関係が構築される」⁽⁶⁾と述べている。また「現代の子どもたちは学校に居ながら孤立することに対する不安や恐怖感が大きく、グループで『群れて』いることを強く望む傾向がある」⁽⁶⁾と述べ、小グループに所属することにこだわりをもつことを指摘している。いまや、クラスは一つにならないと考えておくべきだろう。クラスにおける子どもたちの考え方を一つのベクトルに向かわせることは、もはや困難な状況である。そのなかで自分の考えを押し殺した同調性が基準となっている小グループが、散在している状況である。

異論をとることはタブーであり、容姿や声、話し方に至るまで、共通のものを見いだせなかったときには、疎外され孤立化されるという状況が生まれる。そしてこの孤立化が、不登校を引き起こす最大の要因であると考えられる。このようなことから、元のグループ内で人間関係のトラブルが発生したためグループに居場所がなくなった子どもを、元のグループに戻そうとすることは非常に困難であることはいままでもなく、別のグループに入れ直そうとすることも難しいといえるだろう。

(3) ひとりぼっち回避と、単独行動への移行

小グループから孤立したのであれば、単独行動をとればよいのではないかとも思われるが、小学

生や中学生での小グループでは、ひとりぼっちを回避する傾向がみられる。小学生や中学生には、単独行動への寂しさや、疎外感への恐怖があるからだろう。「ひとりぼっちが可能」つまり「ひとりぼっちでもいいや」と思えるのは高校生になってからだという。インタビューのなかで、「ぜんぜん一人の方が楽です」「でも一人のときもあってもいいとは思うんですけど」と述べているように、高校生になって単独行動が可能となり、さらには心地よいともいえるようになっていく。なぜひとりぼっちを嫌うのか。大嶽・吉田は「集団に所属せず、一人で過ごすということは、生得的にもつ欲求に反した行為であり、欲求に反しているがために、社会的に不自然な状態ということになる。このため、一人で過ごすという行為に対する不安が喚起されてしまう」⁽⁷⁾としている。つまり、友だちがいないことは不自然な状態であり、そのように見られることへの不安感から、単独行動を回避しているという。しかし近年、町のコーヒーショップにおいても一人で勉強をしている若者の姿を、よく見かけるようになった。またお店も、おひとりさま用の机やカウンターを設置している。ひとつの都会的なセンスであり、ファッションのひとつと捉えているのかもしれない。ひとりハンバーガーショップも、高校生からならば行くことができると生徒はいう。それでは、単独行動が出来るようになるには、どのような要因が必要となるのか。辻は「人間が一人でいることに耐えるには、何かしらの拠り所が必要だ」⁽⁸⁾と述べている。孤立化した時に「力となるのは、自分を認めてくれる別の集団・関係があること」⁽⁸⁾と指摘している。ここで、インタビューにこたえてくれた生徒たちにとって拠り所となったのが、アルバイトという学校とは別の人間関係がある場所であったと推察できる。不登校を経験したにも関わらず、二人とも人と接する仕事に就き、各々のアルバイト先では高い評価を受けていたようだ。学校における子ども同士の、自分を抑えることで仲間であり続けられるグループとは異なり、アルバイトの場では人と人とのコミュニケーションを実感し、さらには自己有用感が生み出されたことが、拠り所となったといえる。

(4) 仕事(アルバイト)が不登校の回復に与えた影響

筒井は、「(ビジネスにおける)コミュニケーションの双方向性に焦点を当て、『インタラクティブ・コミュニケーション』という造語をし、その重要性を提唱したい」⁽⁹⁾とし、その研究において「良好なコミュニケーションが実現できれば、それだけで良好な人間関係が築け、情報収集も充実し、良きビジネスライフにつながる」⁽⁹⁾と述べている。つまりビジネスの場では、利潤の追求という最大の目的を達成するために、年齢や立場が異なる相手であっても、お互いに情報を交換し合う双方向のコミュニケーションが基盤となっている。これは双方向でないとビジネスにおいてはプラスにならないためである。ビジネスの場では双方向の情報交換を行うのが日常であるといえる。そこでは同じ志向の情報よりも、新しい情報であったり、一般化されていない新たな発想を求めることが多いと考えられる。学校という閉鎖的な空間に閉じ込められ、片方向で志向をそらせることを求められる環境にいた子どもたちにとって、社会のなかで働くという経験が、双方向のコミュニケーションの正当性を確認させ、自己有用感を生み出すことができるようになったと考えることができる。生徒のインタビューにおいて「逆に自分が教える側になって、けっこう成長したのもあるし」「いろんな話したり、いろんな話を聞けたり、勉強になったりするから」と両名とも語っていることから、仕事を通して自己有用感を感じ、自己効力感へと繋がっていっ

たことが伺える。土井は「自分を評価してくれる仲間の存在が自尊感情を支える最大の基盤であり、またその仲間からの反応が自らの態度決定に有効な羅針盤であると感じられる」⁽³⁾と述べている。双方向のコミュニケーションによって自己有用感と自己効力感が生まれることで自尊感情に発展し、これが不登校から回復できた一つの要因となりえたといえるだろう。

(5) 教師の行動に対して

不登校の状況にあったときの生徒は、教師に対してたいへん厳しい見方をしていることがわかった。「学校にもどそうっていう、してくれたんですけど」というように、不登校で行き詰っているのに、無理に登校させようとする指導が伺える。孤立して不登校の状況になっている場合、学校のクラス内のどこに居場所をつくれるというのだろうか。教師としては登校させようとする努力は必要であるが、やみくもに「学校へおいで」と言っても、それは無理な話であることを承知していなければならない。「しんどくないからおいでよって。そんな、しんどいから行けへんのにって」という発言からもわかるように、教師の不登校に対する理解の甘さがあからさまに表れているように思える。また、学校における夜のカウンセリング設定について、「それも夜やったんで、一年のとき、夜にひとりで学校まで行くのがしんどくて」と述べているのは、前述の住田の引用から次のようなことが根底にあるのではないかと考えられる。「(学校がある)時間帯の家庭は子どもが本来居るべきでなく、居るはずのないところである。」⁽²⁾と述べられているように、昼間は学校が子どもにとって本来居るべきところであり、家庭は本来の居場所ではない。そうであるならば反対に夜は、子どもにとって家庭が本来の居場所であり、学校は本来居るはずのないところと捉えるのではないだろうか。本来居るはずのないところに向かって足を運ぶという行為は、気持ちに前には向かないように思える。夜のカウンセリングに足が重かったのは、このような要因があったのではないかと推察される。

小グループから孤立したことが原因で不登校になった生徒に対して、別のグループに入ればいいじゃないかと考えがちであるが、これは前述したとおり、最も困難なものと捉えなければならない。大嶽・吉田は、「友人グループに入らず一人で過ごしている生徒に対して、誰か一緒に過ごす人が見つかるように促すという指導がなされることが多かったが、必ずしもそういった方策のみを行えばそれでよいとは限らない場合もあるということが考えられる」⁽⁷⁾と述べている。インタビューのなかで、「しんどくないからおいでよって」と教師が投げかけていたことばも、「そんな、しんどいから行けへんのにって」と捉えられた理由が、ここにもあると考えられるだろう。

土井は、「学校の教師から受ける肯定的な評価が、今日の子どもたちにとっては絶対的な自信の根拠となりえなくなっていることに気づかされます。」⁽³⁾と述べている。さらに土井は、「若い世代のあいだでは、グループ内の人間関係から序列性が失われ、学校の教師や親から受ける評価に対しても、心の底では対等な他者からの評価と感じられるようになっていきます」⁽⁵⁾と述べている。つまり担任など教師からのことばかけであっても、同世代からのことばかけと変わらないものと捉えられてしまい、不登校の子どもにとっては登校をするための絶対的な自信へとは繋がりにくいものであったといえるのではないかと。

5 今後の課題

本研究において考察の結果から、教師の対応について、子どもたちの意識との間にずれが生じていることがわかった。日本の社会構造が、製造業などの第二次産業から情報産業が中心の社会へと変化して、すでに長い年月を積み重ねてきている。さらに情報伝達の経路が直接個人への伝達へと変化し、良好な人間関係を継続するために、スマートフォンを片時も手放せなくなっている子どもも多くいる。メールや無料通信アプリで、学校での人間関係を自宅に帰った後もひきずり続けている状況が、不登校を回復に向かわせる阻害要因ともなっている。ICT機器の急速な進歩によって情報伝達媒体が生活の中心に据えられ、また教育の場においても活用されていくうえで必ず弊害が発生し、そのしわ寄せが子どもたちに最も顕著に表れてくる。電話に加えて連絡の手段としてはその価値は大きなものがあることから、日進月歩で進化するICT機器と不登校の関係についても、継続して研究を続ける余地があるだろう。

このような社会の変化に伴う子どもたちの行動の変化について、時間をかけてゆっくりと考える機会をつくる必要があるように思われる。クラス内に存在するいくつかの小グループは、相互のコミュニケーションが乏しく孤立している現状からみると、グループから疎外され不登校になっている子どもへの支援は、もはや個々の教師が一人で抱え込むことが出来る課題ではないだろう。不登校になった生徒をクラスに戻そうとする取り組みなどは、慎重に対応をすすめていかなければ、反対に不登校を助長する可能性がある要因が潜んでいることも考えておかなければならない。不登校は学年や学校全体、または学校外の力を借りて取り組むべき課題である。校内研修などを利用して、不登校についての理解をさらに深めることが必要であろう。

高校生になれば単独行動が可能となることで、不登校から回復するための一つの手だてを見付けることができた。学校あるいはクラスとは別の場所で人間関係を構築することが、一つのヒントになっているように思われる。本研究の生徒たちは、通信制高校に在学しアルバイトをしていたことから、心の拠りどころを見付けることができた。高校生になっても学校が人間関係の中心であり続けるならば、不登校の状況にある子どもたちに、心の拠りどころとなる新たなコミュニケーションの場を提供するための手段を検討していくことも、これからの課題においてもよいのではないだろうか。

【注】

- (1) 片山紀子, 2014, 『入門生徒指導』学事出版.
- (2) 住田正樹, 2004, 「子どもの居場所と臨床教育社会学」, 九州大学『教育社会学研究第』74集, p.93.
- (3) 土井隆義, 2014, 『つながりを煽られる子どもたち』岩波書店
- (4) 堀出雅人, 原清治, 2010, 「子どもたちにおける友人関係の変化」, 佛教大学『佛教大学教育学部学会紀要』第9号, p.235.
- (5) 土井隆義, 2009, 『キャラ化する／される子どもたち』岩波書店.
- (6) 原清治, 2011, 「ネットいじめの実態とその要因(Ⅰ)」, 佛教大学『佛教大学教育学部論集』第22号, p.133.
- (7) 大嶽さと子, 吉田俊和, 2008, 「『ひとりぼっち回避規範』に関する一考察」, 名古屋大学『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』55, p.179.
- (8) 辻大介, 2009, 「友だちがいないとみられることの不安」, 大阪少年補導協会『月刊少年育成』54巻1号, p.26.
- (9) 筒井典子, 2004, 「コミュニケーション・マネジメントの考察」, 高知大学大学院.